

**令和6年度第2回
総合教育会議 会議録**

開催日 令和6年12月18日

**南 あ わ じ 市 教 育 委 員 会
南あわじ市・洲本市小中学校組合教育委員会**

令和6年度第2回南あわじ市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和6年12月18日（水）
午前10時00分 開会
午後 0時10分 閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

- (1) 令和6年度スクールチャレンジ事業中間報告について
- (2) 高校との連携について
「地方部における高校教育を考える首長の会」アンケート結果から
- (3) 中学校部活動地域連携・移行について

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

〈南あわじ市〉

市長	守本 憲 弘	教育長	新 宅 忠 敏
教育長職務代理者	近 藤 宰 常	教育委員	青 木 京
教育委員	清 水 真 澄	教育委員	山 本 真 也

〈学校組合〉

管理者	守本 憲 弘（兼務）	教育長	新 宅 忠 敏（兼務）
教育長職務代理者	狩 野 時 夫	教育委員	近 藤 宰 常（兼務）
教育委員	山 本 真 也（兼務）	教育委員	橋 本 直 之

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 家 田 和 幸
総務企画部副部長兼ふるさと創生課長 中 嶋 宏 昭
市民福祉部子育てゆめるん課長 稲 本 順 也
教育次長 福 田 龍 八 教育次長補兼学校教育課長 上 原 泉
教育総務課長 田 村 智 巨
社会教育課付課長兼生涯学習推進室長 阿萬野 真 司
市立図書館長兼滝川記念美術館玉青館長 山 家 光 泰
スポーツ青少年課長 柏 木 映理子 学校給食センター所長 山 形 さゆり
教育総務課係長 佐々木 友美 教育総務課主査 興 津 里 香

1 開 会 午前10時00分

【田村教育総務課長】 定刻になりましたので、ただいまより、令和6年度第2回南あわじ市総合教育会議を開催いたします。

【田村教育総務課長】 本日の資料につきましては、事前に次第、出席者名簿、協議事項の資料を準備させていただいておりますのでご確認ください。

本日の会議を傍聴される方は、南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願いいたします。

なお、本日は社会教育課長の眞野が公務のため欠席となっておりますのでご報告いたします。

2 市長あいさつ

【田村教育総務課長】 開会にあたりまして主催者であります、守本市長よりご挨拶申し上げます。

【守本市長】 おはようございます。本日はご多用の中、総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。また、教育委員の皆様方には、日頃から、本市、あるいは淡路島の教育環境の向上について、大変にご尽力をいただいていることに感謝を申し上げます。

本日は、令和6年度第2回の会議となります。前回は、「学ぶ楽しさ日本一の実現をめざして」ということで、授業改革や校務改革、教育施設整備といった視点からご意見をいただきました。前回でも色々のご意見をいただきましたが、「学ぶ楽しさ日本一」に関しては、いろいろと仕組みづくりはしておりますが、実際の学校全体での授業改革や、子どもたちが学ぶ楽しさを実感しながら自ら学びに向かっているのかというところまでは至っていないかなと思っておりますので、十分な検証を踏まえて引き続き、学ぶ楽しさとは「好きこそ物の上手なれ」という、ここを非常に重く考えておりますので、そういうところに取り組んでいきたいと思っております。

このような点も踏まえて、本日の協議では令和元年度から実施しているスクールチャレンジ事業をメインテーマに取り上げさせていただきます。委員各位には、スクールチャレンジ事業に関する校長先生のプレゼンの動画をご覧いただいたと承知しております。校長先生のプレゼンについては、これまでなかなか実現しなかったという経緯がありますが、今年度ようやく実施いたしました。

さて、先日「夢見る小学校」という映画の第2弾を見る機会がありました。第1弾

の映画は私立の学校がテーマでしたけども、第2弾は公立学校が舞台で、ほとんど子どもおまかせで学校運営をしているというような学校でございました。その中で強調されていたのは、学校というのは本当に様々なことができる可能性があるということで、校長先生の考え方が非常に重要であると感じたところです。そういう意味でも、校長先生自らの言葉で語っていただくということは必須ではないのかなと感じたところであります。これが1点目です。

2点目は、県外から沼島小学校に転校されて、現在は沼島中学校に通う生徒さんがいらっしゃいます。この方は、なかなか学校に適応出来なくて、いろんな学校を見た後で沼島小学校に来られたのですが、現在は中学校1年生になっております。その生徒さんから市へ提案書が届きまして、内容は、自分は沼島に来て、学校も楽しいし、住んでいる事自体が楽しいと。ついてはこういう沼島への移住留学について、自分が先頭に立っていろんなところにPRしたいので、市長の協力をぜひというものでした。議会へも教育委員会へも同じように提案書が届いているかと思います。沼島は小中一貫校という形で進めておりますし、小規模特認学校でもあります、ひとつの成果は出つつあるのかなと感じたところであります。

3点目は、山陰地方から、お父さんの仕事の関係で南あわじ市に来られた家庭で、当のお父さんから聞いた話ですが、お子さんが市小学校に転校をされたと。実はそのお子さんが、転校する前は不登校になっていたらしいのですが、市小学校に来て非常に楽しくて毎日喜んで学校に通っているということで大変感謝をされました。学ぶ楽しさという運営方針のおかげなのか、たまたま市小学校の雰囲気が良かったのかは分からない部分ではありますが、非常に嬉しいお話で、子どもたちが喜んで学校に行くという環境、非常に重要ではないかと思います。

日本全国で、不登校の数が増え、特にコロナ禍で一気に増え、コロナが終わってからも減らない状態になっております。これは考え方によっては、今の学校のシステムが時代についていけない。そのことがコロナ禍に噴出したという事ではないかと思います。文科省が掲げているのは個別最適ということですが、子ども一人一人に焦点を合わせた教育を今、もう一度きっちりやっていく必要があるのではなかろうかと思います。そういう中で、子どもたちの居場所が学校になれるようにということを徹底していく必要があるのではないかと強く感じております。

本日は、皆様方の忌憚のないご意見をいただきながら、南あわじ市、淡路島の教育の改善につなげていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3 議 事

【田村教育総務課長】 本日の協議事項に入ります。

本日の議題につきましては、1点目が令和6年度スクールチャレンジ事業中間報告について。2点目が高校との連携について「地方部における高校教育を考える首長会議」のアンケート結果から。3点目は中学校部活動地域連携移行について、でございます。この内、特に、議題1点目の、令和6年度スクールチャレンジ事業中間報告については、今回の主な協議事項として様々なご意見を賜りたいと思っております。

議題の2点目、3点目につきましては、事務局の方から現状、成果、課題等についてご報告をさせていただきます。

議題3点目の、中学校部活動地域連携移行につきましては、現時点で非公開の内容も含まれることから、現在傍聴の方はいらっしゃいませんけれども、もし来られた場合は議題3に入る前に、退席のご案内をさせていただきたいと思います。

協議事項につきましては事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願いいたします。

【守本市長】 それでは次第に従いまして協議事項に移ります。

始めに、協議事項1「令和6年度スクールチャレンジ事業中間報告について」、事務局より説明をお願いします。

（1）令和6年度スクールチャレンジ事業中間報告について

【上原次長補】 それでは説明申し上げます。資料をご覧ください。

令和元年度から実施しているスクールチャレンジ事業について、6年目となる本年度、取組の成果について広く発信するとともに、学校長のプレゼン力、情報発信力の向上に資するため、本年7月29日、31日、8月2日の3日間にわたり、中間報告会を実施いたしました。プレゼンは、20校が6グループに分かれて、発表をお互いに聞き合っていました。また、オンラインでの視聴も可能な環境を整えるとともに、録画データをいつでも見ることができるよう共有を図っております。中間報告会実施後には、成果と課題、組織的な取組となる仕組みづくりについての議論をいたしました。

今年度のスクールチャレンジ事業については、実施要項にありますように、主旨としまして、「様々な課題に対し、各校が主体的に課題解決を図ること。特色ある学校づくりを推進すること。」ということで6年間実施してまいりました。

目的としましては、学ぶ楽しさを追求する事業や行事や取組の展開、課題解決に取り組むこと、研修指定等を継続して発展させること、事業への取り組み状況や成果について、情報の共有化を図ることとしております。内容については、防災教育、主体的・対話的で深い学びの授業づくりにむけた授業研究など、それぞれの課題を解決していくものになります。

本日お配りした、事業計画書をご覧ください。それぞれ、「研修テーマ」「めざす子どもの姿」「研修の概要」「めざす子どもの姿への到達度」「対象学年」を各校ごとに記載しております。「めざす子どもの姿への到達度」については、各4項目を掲げており、C、B、A、Sの到達度の段階を示しております。この到達度の評価を基に、スクールチャレンジ事業の予算額を決定し、指導をさせていただきました。

令和7年度からは、スクールイノベーション事業として事業展開をしてまいります。スクールチャレンジ事業からの変更点につきましては、目的の中に「各校において積極的に教育DXを推進し、授業改革、校務改革を図る。」を追加しました。また、対象及び内容の中に「個別最適な学び、協働的な学びの実現に向けた授業研究」「学びをつなぐ小中連携の研究」を追加しております。また、事業費予算はゼロベースで査定することにしております。

来年度以降の報告会につきましては、今年度と同じ時期に実施すること、小中連携した取組の推進を踏まえて、地域ブロック単位で発表することを検討いたします。また、校長が発表するだけでなく、教頭やミドルリーダーになる方、研修担当も同席して補足説明等を入れていくようなことも検討しております。

以上でご説明とさせていただきます。

【守本市長】 説明が終わりました。

それでは、順に委員の皆様のご意見をおうかがいしたいと思います。

【清水委員】 今回、プレゼンの動画を見させていただきましたが、プレゼン力というものはまだこれからなのかなと思いました。せっかく自分たちの学校がどういう取組をしているかをプレゼンしているので、保護者にも知ってもらうためにも、保護者も見られるような形にした方がいいのかなと思います。保護者が参加する人権学習などの研修会をしている学校があると思いますが、講師を外部から呼ぶのではなく、先生が講師になって、学校ではこういうことに取り組んでいますので、保護者の皆さんも一緒にお願いします。ということが大事なのではないかと、スクールチャレンジ事業の内容を見て思いました。学校の先生同士が発表するのではなく、地域特性があるのが南あわじ市のいいところでもあるので、地域をもっと活かすのであれば、校長先生自らが学校でプレゼンをして、改革と一緒にしましょうというのが一番いいかなと思いました。

このような場で、保護者が言えないことが言える環境づくりが必要ではないかと思っています。そのような関係性ができたら、爆発的に授業改革が進むのではないかと考えています。この事業自体にはとても期待を持っていますので、ぜひこれからもお願いしたいです。

また、事前にいくつか動画を見させていただいて、学校の課題が見えてこない発表

が多かったという印象があります。取組に関する紹介はあったのですが、子どもたちの反応や、先生たちはどう動いたのか、というところの話がなかったのではないのでしょうか。例えば、ベテラン先生がうまく個別最適な授業ができてない、という課題があったとして、それに対して校長先生はどうアプローチしたのかとか、学校と一緒にその先生たちにどう対応したのかっていうところがなかったので、それがないと授業改革にはつながらないのではないかと思います。また、子どもたちは、タブレットを使った発表がとても上手になってきています。タブレットを活用して自分で考えたことを発表するので、タブレットを見ずに喋れる子もたくさんいます。しかし、校長先生たちはプレゼンで原稿を読んでいるので、熱意が伝わってこないのが残念に思いました。ぜひ自分の言葉で発表していただきたいと思いました。

【青木委員】 校長先生ご自身が楽しそうに、聞いている人の顔を見ながら、話をしてくれたらもっともっとよかったかなと思いました。子どもたちに自分の言葉で伝えることを求めるのであれば、我々も頑張ろうという感じを出していただきたいと思いました。

校長先生によるプレゼンは今回が初めての試みでしたが、何をどう発表するのかということが徹底されてないのかなという感じを受けました。チャレンジ事業の中間発表ですから、年度末の段階ではこのように評価する予定ですか、こういう指標でいきますよとか、現段階こうですよという発言があるのかなと思っていたのですが、ほぼなかったと思います。私は動画をたくさん見させていただきましたが、学校紹介に留まっていた学校も多かったので、せっかくお忙しい校長先生方がこれだけの時間を費やすのだから、先生たちにもこれを活かすぞとか、他の学校からも意見を聞くぞとか、うちの学校はどこをもっと変えられるだろうとか、他の先生たちからもいろいろ聞いてやるぞ、という気持ちでこの機会を活かしていただいて、もっと貪欲になっていただいた方がいいでしょうし、楽しいだろうなと思います。先生が楽しいと思っていただくことで、子どもたちも楽しいと思えるのではと思いました。

発表順については、教育委員の皆さんと、地域でまとまった方がいいかもとか、小中学校を混ぜてもいいのかなとかいう話をしていたのですが、早速、来年度に組み込んでくださっているのもいいなと思っています。学校間でプレゼンの得意な先生を他の学校から借りてくるぐらいの勢いで、せっかく予算や時間を使うのだから、どんどん進めていただきたいと思います。優秀な指導主事の先生が教育委員会にいらっしゃるので、その方々にも関わっていただいて、どんどんやってもらえたらと思っています。

また、校長先生が、保護者全体に話す機会というPTA総会とか、入学式、卒業式などがありますが、そういう機会は、うちの学校ではこういうことをするので、学校も一生懸命やりますから、家庭も地域もよろしくお願いしますという気持ちを直接

届ける場面でもあると思いますので、どんどん発信していけばいいのではないかと思います。特に入学式は、保護者にとって、この学校ではどんな教育をしてくれるのだろう、一緒にやっていけるかな、と色々思っていると思います。そういう時に、この学校はこういう方針でいきますというお話が、校長先生や担当の先生からあるといいのではないかと思います。家庭と連携すると、家庭からの声が上がってきやすいし、先生からも連絡しやすいという雰囲気、一緒にやっていく仲間だという気持ちが生まれると、今問題になっている不登校や問題行動が減ってきたりするのかなと、希望的観測ではありますが思っております。来年度も中間発表をされる予定とのことですので、できたら私も見に行かせていただきたいと思います。

【近藤委員】 動画を全て見たわけではないですが、ある中学校の校長先生が、他の学校の取組、特に小学校の発表を見ることができてよかったと感想を述べられていました。色々ないい学びをしていることがわかってよかったと。後で教育委員の中で雑談をした時に、子どもたちに学び合いを進めているのだから、校長先生も学び合いが必要だなというご意見があつて本当にその通りだと思います。校長のプレゼン力を上げるという目的でもありますので、ぜひ学び合いをしていただきたいと思います。私がひとつ気になったのは、課題の中に「校長の負担感が否めない」とあることです。初めてのプレゼンで校長先生も慣れていなかったのかなという部分もありますが、どのようにお考えなのかなと、気になるころではあります。どんな団体や組織でも、トップが方針を伝えるのは当たり前ですので、ぜひ学び合いも含めて頑張りたいと思います。それから、予算についてですが、これはいろいろな制約があるので難しいとは思いますが、少しでも増額をしていただいて、ますます学校にやる気を出していただくということも大事ではないかなと思っております。

【狩野委員】 スクールチャレンジ事業は、「学ぶ楽しさ日本一」をめざす取組の一つだと思います。ところが、「学ぶ楽しさ」を味わわせる大切さを十分理解した上で自校の課題を洗い出しているのだろうかと感じました。私が見させていただいた動画からは、課題解決へ向けてのプレゼンが少なかったように思います。

「学ぶことが楽しい」ということは、勉強を理解し、友達との関係が良好で、学校で認められているということだと思います。学ぶことが楽しい子どもが増えると、不登校やいじめ対策にも必ず繋がると思います。もちろん学力も向上するものと思います。もし、もし不登校やいじめが学校の課題であるならば、この事業をその対策に活用したらいいと思います。学校システムを変えることを課題にするということも一つの方法だと思います。

広田小学校のプレゼンでは、授業改善や主体的に表現できる子どもの育成をめざしているという発表でした。校長自らが授業改善を進めているのだと思います。それは

いいことですが、広田小学校は児童数が多く2クラスありますから、同じ学年の先生同士で研鑽することも必要なと思います。校長先生がよく子どもと遊んでいると聞きます。校長先生の行動が、他の先生にも影響すると思いますので、他の先生も子どもと遊ぼうとする行動へとつながるのではないかと思います。

広田中学校のプレゼンでは、今年の広田小学校の運動会に、広田中学校の校長先生をはじめ多数の広田中学校の先生が見に来ていました。私が教育委員になって8年目になりますが、このようなことは初めてのことです。また、広田中学校の文化祭では、広田小学校6年生の児童が見学に来ていました。校長先生に話を聞きますと、いつでも広田中学校の授業を見に来てもらってもいいですよ、という取組をしているそうです。プレゼンの中で、9年間の学びのつながりというテーマが入っておいりましたので、しっかり小中の連携を実践しているのだな、と感心しました。ぜひこれからも継続していただきたいと思います。

【橋本委員】 プレゼン動画は2, 3校しか見ていないのですが、プレゼン内容が予算の査定に響くということでしたので、学校にとって大変だなという感じをまず持ちました。やっぱり学校はお金が必要ですので、そのためにこのような取組はこれからも継続していくべきものだと思います。

プレゼンでは、予算をこれに使いましたという報告も入っているのかなという事で最初見ていたのですが、他の委員さんもおっしゃっていたように、教育委員会の学校訪問の時の学校概要の説明のようになっていたので、この内容で査定をするのは逆に事務局の方が大変ではないかなと思いました。実は洲本市でも、14, 5年ぐらい前になると思うのですが、査定をした時期がありました。しかし1, 2年でなくなったとのことでした。理由として、査定がとても難しいとのことでした。校長のプレゼン力という話もありましたが、実際学校でとてもいい取組をしても、校長の説明が失敗したら、査定額が下がってしまうのはいかなものかとも思いました、その逆もあるかと思います。ですので、査定する側の大変さというところもあるのかなと思います。疑義が出た場合の対応をどうされるのかなといったところを、少し心配をした次第です。

【山本委員】 私も動画を少し見させていただきました。感想としましては、学校の事業の説明をしていくような感じで、その中間での結果報告などがあまりなかったように思います。今回、校長先生のプレゼンは初めてということですので、何をどうしたらいいかわからないような状態で始まったのではないかなと思いました。学校としての取組や方向性を校長先生が発表するのですが、その下には教頭先生の意見とか、担当の教員の意見とかも取り入れた上で、まとめた結果をそこで発表するものなのではないかなと思いましたので、校長先生の思いだけなのであれば、もっと学校全体の思

いを取り入れるような話をしてもらえたらもっと良いプレゼンになるのではないかと思います。

今後の課題として、小中連携の話がありましたが、南淡中学校の学校訪問の時に、複数の小学校の子どもたちが南淡中学校へ入学して、ある小学校出身の子はうまく溶け込めてないという話があったかと思います。この事業計画の中ではそれぞれの小中学校の考え方というものもあると思うのですが、私の考え方が正解かは分かりませんが、例えば中学校としての方向性をまず決めて、それに中学校区の小学校が方向性を向かわせていくことで、中学校に集まってきた時には同じ方向性を持てるというところも大切ではないかなと思いました。逆に小学校の方向性に中学校が合わせるというのが良いのか分かりませんが、連携するにはどこかに基準を置いて、そこに向かわせていくという形をとるのも教育の形じゃないのかなと思います。小学校の良いところは残しつつ、そういう形を考えることはできないだろうかと思いました。

また、スクールチャレンジ事業の中にどのような取組が入っているかわかりませんが、先月、南あわじ市防災訓練が倭文小学校で行われ、私も参加させてもらいました。倭文小学校は小規模な学校ですから、1年生から6年生までの児童が皆さんの前で防災についての発表をしておりました。私も市の防災訓練には今年で6回目ぐらい参加させてもらっていますが、会場校の子どもたちの発表という取組がこれまでの学校ではなかったように思ひまして、とても良かったなと感じました。子どもが発表するとなると、保護者も参加しますし、地域の人たちも地域の子どもの活躍を見に来られるかと思います。それによって、地域の人たちの防災意識も高くなるのかなと思います。ですから、今後も色々な学校で防災訓練が行われると思いますが、倭文小学校のような取組も取り入れて、子どもたちに何か担ってもらおうということも考えていただければと思いました。

【新宅教育長】 教育委員会内では、スクールチャレンジ事業中間報告会の最終日の8月5日には、振り返りの会を持ちました。現在、市で進めているDCAPプラン、これを、直後プランと呼んでおりますが、事業を実施したすぐ後にその振り返りをして来年度の方針を決定していくものです。会には、指導主事含め、参加した関係者を集めて、まず成果について話し合いをしました。成果としましては、各学校の取り組み状況が非常に明らかになったということが挙げられます。また、直接、質疑応答をする中で具体的なところも見えてきたこと。そして、他校の良いところを取り入れようとする様子もそのグループの中で、あるいは、オンラインを通した質問の中で見えてきたこと。また、自校の取組について整理ができた、あるいは考えがまとまった、見通しが持てたという意見も校長の方からございました。校長のビジョン、授業改革の道筋が、見えたということで、非常に成果があったのではないかと考えています。一方、課題の方ですけれども、小中連携の必要性が浮き彫りになったということです。

そして、このスクールチャレンジ事業が、ひとつの小中連携のアプローチになればいいという話がありました。私も今回の校長のプレゼンを聞く中で、盛んに質問として出したのは、中学校ではどうするのですか、小中連携をどうするのですか、9年間の学びをどう繋げていくのですか。というところです。また、校長の負担感が否めないということが課題として挙げられたことについては、これは管理職の大きな役割でありますから、今回の結果をどのように活かしていくかというあたりをしっかりと、校長先生には考えていただきたいと思っていますところ。また、チームで分析が出されてないという意見や、結果や課題の要因の分析が弱いというところもあるのではないかなという意見もありました。

来年度以降の報告会については、今年度と同時期に実施をするということを決定しております。また、発表をブロック単位で実施することで小中連携を強めていけないかと考えているところです。また、校長が発表するだけではなく、教頭、研修担当等が同席をして補足説明等をしてはどういうかということ。先ほど、委員さんからもお話がありましたが、教職員へどう共有していくのかといった意見が教育委員会の中でも出ておりました。

令和7年度から「スクールイノベーション事業」として実施してまいります。授業改革と校務改革という観点から、来年度からは補助金ではなくて当初予算に組み入れていくという形にしております。そして教頭の業務を軽減させていくということを考えているところです。当初予算に事業費を組み込むことで、教頭の仕事をかなり削れるのではないかと思いますので、その分、教頭先生には子どもの教育に力を入れてもらえるのではないかと考えております。

当初予算に組み込む場合は、事業の予算総額を10月までに出す必要がございますので、9月末を目途に計画書を提出してもらっております。そして教育委員会で査定をして、年内に予算を決定していきます。先ほど、査定については委員からご意見が出ておりましたが、これについては、プレゼンの仕方が、慣れてない、あるいはどういう視点でプレゼンしていいかということが定まらなかったという中では、それをそのまま予算に反映させてはいけなと。やはり内容をしっかり見て査定を行う必要がアますので、計画案については十分確認した上で、一旦返して再度提出を求めた学校もたくさんございます。そして、学校と連絡を取りながら最終の計画案を出していただいたということです。学校の方向性をしっかりと確認して査定していきたいと考えております。

委員からご意見がありましたが、保護者にもプレゼンしてはどうかということについてはその通りです。ただ、今回は初めてのプレゼンということもあり、中には個人情報等が含まれているものもございますので、きちんと精査する必要がござアます。

校長先生には、この発表の内容を元に学校での取組状況を保護者や地域に周知を図ってくださいという事を指示しております。そして、どこでどういう風に発表したか

という事について、年度末までに教育委員会へ報告するよう求めていますので、そこで、学校からの周知や発信の取組状況が見えてくるのではないかと考えております。

それから、今年度の教育委員会学校訪問では、市内学校の半分の10校が対象になったわけですが、私の方からは教頭に対して、現在、子どもたちにつけたい力と学び方について、自分の学校の授業改善がどの程度進んでいるのかという評価を求めました。教育委員会では、指導主事が策定しているSABCという4段階のルーブリック評価を設定しております。C段階では、校長がつけたい力と学び方の説明ができること。B段階は、ミドルリーダーがつけたい力と学び方の説明ができること。これは芽が出始めた段階です。A段階は全教員がつけたい力と学び方の説明ができること。これは事業改革の推進という段階であります。そしてS段階では、子どもたちがつけたい力と学び方の説明ができること。これは自分たちで授業を進めていける力をつけていくということになります。また今後改正する予定ではありますが、今年はこのような評価も始まっております。教頭に聞いてみますと、ほとんどの教頭はB段階であると答えています。ミドルリーダーが説明できるあたりで止まっているということで、なかなか全先生方にまだ浸透ができていない状態ですので、どう取り組んでいくかということについて宿題を出しているというところでございます。このプレゼンによる中間報告は初めての取組でしたが、委員の皆様に見ていただいて、様々なご意見をいただきましたので、来年度に向けてまた取り組んでいきたいと考えております。

【守本市長】 私も感想としましては皆さんとほぼ同じような感じでありました。このスクールチャレンジ事業は始めて6年になると思いますが、当初、教育委員会から予算の要求があり、その時に付けた条件が校長のプレゼンでした。しかし実現したのが今年度ですね。どうしてこんなに時間がかかったのかということと、それから、校長の負担感が否めないっていうところは、認識ギャップが非常にあったなと感じております。要はその学校の方針について校長が発信できないとはどういうことか、というところが私としましてはある意味不満を持っていたところでもありますので、この度、プレゼンが実施できたことは大きな進歩であると考えております。もう一つは、皆さんがおっしゃったように、進めたいことやめざすことは、ある程度校長先生がお話しになりますが、そこに到達するために何がネックになっていて、それを克服するために何をするのか、というところがほぼ出ていなかったかなと感じました。先生は、生徒のプレゼンに対しては、どこがよかったっていうのを一生懸命褒めるわけですね。ですから、校長先生の中で誰か深掘りしたプレゼンをしていただいて、ある意味恥を晒すみたいなことはどうしても出てきますけれども、学校としてはこの部分がまだできてないとか、ここはこういう風に進めたいというようなことを、誰かにまずしていただいて、こういうことを発信するべきなんだ、ということ、教育委員会の皆さんに思ってもらいたいというのも、一つの方法かなと感じたところではあります。

一方で、この学校ではこういうことに取り組んでいるのだな、と勉強になった部分も確かにありました。印象に残っているのは沼島の取組ですけれども、沼島と阿万とのプールでの交流ですね。それからオンライン授業の活用です。これが今後の学校の方向性として、特に小学校の児童数が減少していく中でのひとつのヒントになったかなと思います。少人数だと世界が狭くなってしまうというデメリットを克服する方法を、沼島が今実証しているといった印象を受けました。あとは、細かい話をすると、若干気になったところは、和光大学の教授のお話で、教育とは「教える」プラス「育てる」で、まずは「教える」が先で「育てる」が後、とか、この1時間で何を教えるか教師が明確になっていないと活動あって学びなしとなる。だから目当てを明確にする、ということでした。これもひとつの考え方だとは思いますが、私の個人的な印象からすると、これからの世の中では、試行錯誤して、自分自身が解決策というものを持てなければならぬと思いますので、子どもたち自身が苦悩しながら自分たちで見つけ出していかなければいけないということを考えた時に、まず「教える」が先にあっていいのかなというところが引っ掛かりました。いずれにしても、校長先生に発信していただくことはこれからも非常に重要なことだと思っております。ある程度の皆さんのレベルを見ながらどんどん発信していただくということが大事だと思いますし、おそらく発信することで保護者の皆さんからも意見がたくさん出てきて、大変になるというようなこともあるだろうと思うますので、そのあたりは教育委員会が支えていただきたいと思います。

【青木委員】 皆さんのお話を聞いて思ったのですが、校長先生が子どもたちの前でプレゼンをして見たらどうでしょう。子どもたちから、先生これ足したら、とか、先生それ間違ってるやん、といった意見が出てくるかもしれませんね。また、その時に保護者もよかったらどうぞ見に来てください、というのもいいと思います。いきなり教育長の前でプレゼンというのは校長先生としてはしんどいのかな、という気もします。トライアンドエラーで、やってみる機会が校長先生にも必要かなと思いました。また、録画を見せていただいて思ったのですが、せっかくの質問の声が聞こえにくいのが残念でした。市役所に詳しい方もいらっしゃると思うので、どう録画すればそれを外に出せるものになるのか。ということを考えていただきたいと思います。

【清水委員】 今年、教育委員会の学校訪問に初めて行かせていただき、今回、プレゼン動画を見せていただき、実際にそういう取組されているのかな、と疑問に思った部分がありました。

【守本市長】 今のお話を聞いて思ったのですが、校長先生は、教育長の前でプレゼンするのと、子どもたちの前でプレゼンするのと、どちらが恐怖だと思いますか。子ど

もたちの前ですよね。

【清水委員】 私もそう思います。しかも子どもたちには、子どもたちに伝わるような言葉を使っていけないといけないというところが、実は難しいのではないかなと思います。先生たちが実際に取り組んでいることを体感しているのは子どもたちなので、それを聞いた時に、もしかしたら、先生がそういうふうに乗ってるんだな、じゃあ私たちも一緒に先生たちに協力して授業を作ろうって思う子もいるかもしれないですね。

【青木委員】 いきなり校長先生が子どもへプレゼンをすると趣旨が変わってきしまうので、例えば校長先生が練習のために先生たちにプレゼンすると。それをその周りで子どもたちも聞きますか、よかったらおいでよというぐらいの感じでもいいのかなと思っています。そういう方法もあるということ子どもたちにも示せると思います。密室で会議するだけが会議じゃなくて、どんどん広げて、話せばいいということ先生たちが見せるのも一つの方法だと思います。また、研修担当の先生や実際に動いてきた先生は言いたいことをたくさん持っていると思います。校長先生が変わってしますよ、というぐらいの先生は絶対いらっしゃると思いますので、一緒に発表に来てもらってもいいですし、そういう場をどんどん広げていくと、効率はいいし成果も上がると思います。ですので、そんなふうにやってみる学校が出てきてもおもしろいのではないかなと思います。

【新宅教育長】 これは、ボトムアップだと思うのですが、我々教育委員会や校長も、先生方にどういう風にやる気を持ってもらって積極的に授業改革を進めてもらえるかというところを大事にしたいと思っています。ですから、急いてはいけないとも思っています。教育委員会から発信はしつつ、先生方の動きも見えてあげて、どこを褒めて支えていくかというあたりが大事だと思います。それは、子ども対しての接し方にも共通していると思っています。

私も、校長の時には、子どもたちの前で発信の機会があるたびに、そこで何を子どもたちに伝えるかというところをかなり練り上げましたし、学校だよりを使って保護者や地域への発信を月に1回は必ずしておりました。そこでは、行事についても紹介しますが、校長の思いを必ず入れておりました。そしてそれを毎月繰り返すということが大事だったと思っています。最近、あんしんネットを使って、毎日のように保護者へ配信している校長もおられますが、内容が、その日にあった事だけにとどまっています。毎日発信しなくても、校長がどんな思いで教育を進めていこうとしているのかということがわかるように伝わる発信力が一番大事なのではないかと考えております。

学校訪問の際、学校の経営計画書の中で、つけたい力と学び方というところを記載

していない学校が多いです。指導主事が作成した目標設定シートの中で、S A B C という4段階のルーブリックというものを設けており、つけたい力と学び方の説明を子どもたちができるということを最終目標としていますが、実際にはそれが見えてこないという現状がありました。そこで私から校長、この学校がつけたい力と学び方、これを子どもたちにどのように説明していくのか、また、保護者や地域にどのように説明をしていくのかというところを考えてください、と宿題を出したところです。

今回の中間報告は初めての試みですので、今後この事業を通して、学校が地域とより連携を図りながらより良い教育を展開していただけるようにと考えているところです。

【守本市長】 さきほどの教育長の話にもありましたけども、学校がつけたい力と学び方というところを各学校できちんと考えて、子どもたち、保護者、地域に発信をしていくということが非常に重要であるというふうに思っております。

学校の様子を見させていただく機会が何度かありましたが、その中で私自身感じましたのは、学校によって、大分そのカラーが違うということです。例えば阿万小学校は小規模校ですが、非常にまとまった学校だという印象を受けました。子どもたちも非常に活発で、のびのびと学校生活を送っているというような印象を持っております。ですから、少人数であることのメリットをこういった学校を見ると感じられる部分はあるかなと思います。反対に少人数であることのデメリットも当然あると思うんですけども、少人数であることのメリットを伸ばしデメリットを克服するという視点は非常に重要であるかと思えます。

先ほど狩野委員がおっしゃったように、広田小中学校の連携は非常に良い例だと思っております。小学校の校長先生と中学校の校長先生とが、頻繁に連絡を取りながら、一緒に協議したり、また、お互い授業を見に行ったりする取組ですね。このような取組を他校でも推進していきたいと思っております。

阿万小学校のプレゼンは非常に具体性があります。阿万小学校では、現在、不登校も少ないので、校長先生も自信を持って喋れるのだと思います。例えば、それなりに不登校の子どもがいる学校の校長先生にとっては、プレゼンする時に慎重にならざるを得ない部分があると思います。それをどこまで、引っ張り出すかというところは正直あると思っております。まずは、実態にしっかり取り組んでもらって、それをまた発信をしていってもらいたいということも大事だろうと思います。その部分は一体となっていなければならないことだと思います。学校のそれぞれの状況もあると思いますので、教育委員会もそのあたりは支えてあげないといけないと思います。

今後とも、各学校がそれぞれ、特色を活かし、地域と連携を図りながら、より良い教育を展開していけるように、私自身もしっかりとサポートしていきたいと考えております。

【清水委員】 最初の説明の中にも評価段階の話がありましたが、それに関連して、子どもたちが先生と一緒に、こんな授業をしていますよ、といったプレゼンをしたらおもしろいと思いました。

【新宅教育長】 まさにその通りで、実は阿万小学校で試しに実施したことがあります。研究授業発表をした後で、子どもたちでその授業を振り返るということをやってみました。このような取組は全国のいろいろなところで今試されております。だから、子どもたち自身も授業を振り返って評価する。それは自分たちがつくる授業だからできるのであって、一方的に教えてもらった授業ではできないでしょう。

【清水委員】 ある授業に対しての評価を、6年生や5年生が正直に評価することはいいことだと思います。それを基にして先生たちがどう改善していくかという課題が多く見つかることによって、先生たちのやる気に繋がる可能性も無くはないかなと思います。試行錯誤しながら進んでいくのもひとつですし、子どもたちが学びたいという気持ち、先生たちが一緒に子どもと学んで楽しく授業をしたいという気持ちがそれぞれにあると思いますので、どちらが先でもいいかと思います。

先生よりもタブレットを使いこなせる子どもたちもいますので、プレゼンも上手にできるのではないかなと思いますので、それを見て先生たちの熱意が上がってくれると嬉しいと思います。

【近藤委員】 今回は、初めての取組だったということもありますが、学校紹介に終わっている校長さんが結構いらっしゃったので、スクールチャレンジ事業の中間発表の趣旨からいうと、まずは、課題を把握し、こういう施策によってこういう風になっていくであろうという仮説を立て、今、何パーセントぐらい実行できていて、予算もこれぐらい使っています、といったストーリーが分かっている方と分かってない方がいらっしゃいました。校長先生の負担感が課題ということでしたが、単純に、来年の進捗の仮説があって、授業進捗状況や子どもたちの状況、先生方の感じ方、といったようなことが、校長先生方は、すぐに上手に発表できるようになると思っています。

また、広田中学校の発表を聞いていますと、校長先生は、年度始めに職員や子どもたちに学校の方向性などを伝えているということが感じられ、とても好印象を受けました。何をすべきかわかっている校長は、教育長のお話にもありましたが、年度始めに子どもたちにも所信表明をするし、PTA役員総会などでも発信していると思いますので、プレゼン力が上がれば、子どもたちやPTAなどでの発信も短い時間でインパクトのあるものができていくのかなと思います。そういうねらいもあってこの事業をされているのだらうと思っていますし、校長先生の学び合いにもつながるのだと

思います。

【青木委員】 各学校のつきたい力と学び方を、毎年作成している学校要覧に載せることはできるのでしょうか。

【上原次長補】 学校要覧に載っている学校目標は、もう少し大きな目標で、これまでの学校の歴史も引き継ぎながらの目標になっていると思います。一方で、この数年で取り組むことが授業計画になってきますので、学校要覧に記載するのとは少し意味合いが違ってくるのではないかと思います。

【青木委員】 何かの形で、子どもにつきたい力と学び方について、保護者にお知らせすることは大事ではないかと思います。

【守本市長】 事務局の方で一度検討よろしくお願いします。

（２）高校との連携について

「地方部における高校教育を考える首長の会」アンケート結果から

【守本市長】 続きまして、協議事項２「高校との連携について 『地方部における高校教育を考える首長の会』 アンケート結果から」について、事務局より説明をお願いします。

【田村教育総務課長】 それでは「高校との連携について『地方部における高校教育を考える首長の会』 アンケート結果から」についてご説明申し上げます。

資料をご覧ください。

前回の総合教育会議でも少しご説明申し上げましたが、地方部においては県立高校の教育環境や存続問題が課題であり、地域活性化にとって不可欠な存在であることから、県内地方部の首長有志の会が令和２年に立ち上がり、以降、県知事や県教育長との面談を実施してきたところです。

このたび、今後の取り組みの方向性について意見を集約すべく、６月から７月にかけて、加盟２４市町に対しアンケート調査を実施いたしました。

アンケートの中では地方部における高校存続の重要性や地方部の高校に対する市町の支援の実態、また高校の魅力化にあたっての課題などを問いかけ、全市町より回答をいただきましたので、ここでその結果概要についてご報告をさせていただきます。

今後はこの結果を踏まえ、首長の会において課題と取り組みの方向性を確認し、県

へ訴えかけていく予定としています。

それではアンケート結果概要をご報告いたします。まず、地方部における高校存続の重要性については、全市町が「重要」または「やや重要」としており、存続が地方部にとって重要であることが分かります。

次に現在の兵庫県の方針、これは県が示す「県立高等学校教育改革第三次実施計画」に示された県立高等学校（全日制）の望ましい規模と配置に向けた県立高校6組14校の発展的統合の取り組みなどのことですが、これに対する認識として「満足、不満のどちらでもない」といった回答が半数となっており、続いて「やや満足」との回答が34パーセントとなっており、「やや不満」や「不満」と回答した市町は合計で1割程度と、比較的理解が示されているようです。

続いて地方部の高校存続にあたっての重要な要素については、「独自性の明確化」が最も多く全市町がこの点を重視する結果となりました。

次に地方部の高校が学生に選ばれるために重視される点については、「設置されている学科やコース」「通学の利便性」「学校のイメージや校風」の順に重視されるという結果になりました。地方部においては、通学の利便性という点も比較的重要であるようです。

続いて地方部の高校に対する市町の支援については、通学費の助成を既に実施しているという市町が最も多く、次いで特色ある教育活動への支援や高校の魅力化に対する資金援助などが多くみられました。南あわじ市においても令和3年3月に淡路三原高校と淡路景観園芸学校、国立淡路青少年交流の家の4者での包括連携協定を締結しており、淡路三原高校ではこの連携を活用しつつ「総合的な探求の時間」において地域の魅力や課題を発見し、分析や提案を行う取り組みを実施しています。こうした取り組みに対し、南あわじ市としても特色ある教育活動への支援として令和4年度より地域活動支援事業補助金を交付しています。

次に、首長の会が兵庫県に対して要望することについては、学習面や経費面、部活動などでの各高校の個性化について、県の方針を打ち出してもらいたい、という声が多くありました。つまり、3つめの設問でご説明申し上げたように、地方部の高校が存続するためには独自性をしっかり持つことが重要であり、こういった独自性を持たせるために、県としてもどのような取り組みをしていくか、しっかり方向性を示してもらえよう、要望していくことが求められていると考えられます。

さらに、高校の魅力化にあたっての課題については、市町における財源確保のほか、県や教育委員会の理解が得られないなど、そもそも高校自体に問題意識が希薄であるといった答えも比較的多くありました。

最後に自由意見をいくつか紹介します。

まず1つ目にあるように、自治体ごとに県立高校と行政の意見交換が必要との意見、次いで3つめ、高校魅力化については県が主体であるが、県と市町が役割分担して取

り組むことが重要であるといった意見、また、4つ目には小規模校にはデメリットがあるため統廃合、という考えになりがちだが、高校がなくなることは地域の衰退につながるため、小規模校のメリットを伸ばしつつデメリットを克服していくことが必要といった意見もありました。

以上、一方的な説明となってしまいましたが、事務局からのご説明とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【守本市長】 事務局からの説明が終わりました。

若干補足させていただきますと、第3期の高校のあり方の方針が検討されていた時期に、それに対して意見を届けていこうということで首長の会が設立されたわけですが、この段階での兵庫県の方針としては、各市町に高校が1校しかない場合には、その存続を基本的に認めようということになっていました。先ほどのアンケートの中にもその時の兵庫県の方針について、満足、やや満足、どちらでもないなどを選択するものがありましたけれども、このどちらでもないという部分は、第3期の基本計画では高校が市町に1校の場合は存続するといいつつ、それが永続的かどうかという保障は全くないわけです。ですから、次の計画でこの部分が一転してやっぱり統合するということになる可能性を懸念している市町が多いことから、どちらでもないという回答が多数という結果になっているのではないかと思います。

兵庫県とは、高校という視点よりも、子どもたちの教育という視点や学校を今後どうしていくかという視点で議論をしていく方がいいのではないかと思います。

以上、少し補足をさせていただきました。

この件につきましては、主に報告となりますが、教育委員の皆さんにも順番にご意見をいただきたいと思います。

【山本委員】 淡路三原高校ですが、現在は、受験した子たちは全員が合格する状態になっています。数十年前と比べても、生徒の入試に対する考え方が変わってきているのではないかと感じており、淡路三原高校への評価やイメージの変化が気になっております。

私も、各市に高校が1つはあることが必要だと思っております。やはり、市内の小中高へ通う子どもたちが少ないまちは寂しいと思います。そういう意味でも淡路三原高校も特色を出していくことは必要だと思いますし、発信できるものがないとなかなか入学したいという気持ちに結びつかないと思います。学校によって考え方や状況は違うと思いますが、市として、高校への支援を行い、魅力的な学校にしていく必要があると思っています。

【橋本委員】 淡路島が第1学区に変更になったときには、生徒の島外への流出が懸念

され、島外から淡路島の高校へ生徒を呼び寄せようということで、垂水で淡路島内の高校の入学説明会を開いたこともありました。しかし淡路島へ来てくれたとしても淡路高校までで、なかなか洲本市や南あわじ市まで来てくれる生徒がおらず、そのうち入学説明会をしなくなったという経緯があります。

小規模高校で存続を考えた際に懸念されるのは、例えば理科という科目の中にも様々な専門の分野の教諭がおりますので、教員の確保が難しいのではないかということです。現実には、洲本市で、専門の科目を複数の中学校で掛け持ちしている先生もいらっしゃいます。学校の運営としては、このような状態は避けたいところであると思います。

ですので、今後は校区の変更というような議論もされるのではないかと考えております。

【狩野委員】 現在、淡路市では島外の高校へ通学している生徒が増加しております。やはり、特色ある高校づくりを進めないと、人数がどんどん少なくなっていく高校は元気がなくなってくるのではないかと思います。

また、皆さんには定時制高校にも関心を持っていただきこれからも維持していただきたいと思っています。

【近藤委員】 最近、ある高校の生徒と話をする機会があったのですが、初心者だけど高校でバレー部に入ったと。これまでバレーをしたかったけど、機会がなかったので、やっと願いが実現したということでした。強い部活動をめざしているような高校のバレー部に、このお話の生徒は入れないと思いますが、初心者でも楽しく部活動ができる高校がある、この辺りにも高校の特色のヒントがあるのではないかなと思いました。

【青木委員】 私が気にかかっているのは、バス通学と自転車通学との連携についてです。バス通学をしている生徒は、自転車の置き場所の問題があります。旧緑庁舎の自転車置き場は洲本方面へ通う高校生の自転車でいつも満杯になっています。また、生徒が時間をつぶせる待合空間や自習室があると、送迎をする保護者の負担感を減らすことができるのではないかと思います。

高校の特色化については、サッカーの聖地をめざすとか、初心者受け入れOKの部活動とか、寮生活が送れる学校とか、農業に真剣に取り組む学校とか、外部からのプロの方に教えてもらえる学校とか、いろいろあると思います。ぜひ検討していただきたいと思います。

また、内申点についてですが、本当に必要なのかなという思いがしています。広島県では内申書が簡素化されています。内申書の存在が、一人の先生の懐具合に左右されて怯えなければならないものとなっていることには疑問を感じます。

【清水委員】 アンケートの自由記述欄に、「私学との関係も含めて兵庫県教育のあり方を市町と共に議論すべき」という記載がありました。私学は授業料が公立校に比べて高いですから、生徒が集まってくれないと運営ができないので大変だと思います。

また、生徒に選んでもらえる高校になるには、誰でも受け入れられる体制が必要だと思います。高校のいろいろな環境を整えていかないと生徒は減る一方ですし、今後、淡路三原高校の存続も危うくなってくるのではないかと思います。

また、中学校部活動の地域移行が進み、どんどんクラブチーム化されると、高校で部活動へ入る生徒も減っていきますので、部活動の特色化というところは難しいところだと思います。

【新宅教育長】 アンケートの自由記述欄に、「未来を担う若者世代が集う高校が廃止されることは地域の衰退にも直結する問題である」と、まさにそうだと思います。地元の高校の存続は市全体で支えていく必要があると考えています。そのためには、小中高の連携や教育の一貫性を打ち出し、魅力化を発信していく必要があると思います。

【守本市長】 島内の高校は、全員入学時代になっており、高校の選択機能が働いていません。いかに生徒に選んでもらって入学してもらおうかということを考えると、淡路三原高校では、地元と密着した取組で農業を勉強し、吉備国際大学へ進学するといった道筋もあるのではないかと思います。淡路島内で、地域と連携したしくみをつくることができればと考えます。

また、スポーツなどで上を目指す生徒は、県内の高校ではなくて、県外のスポーツの強い高校へ進学してしまいますので、なかなか引き留めるのは難しいです。ですから、進学を考えている生徒に徹底的に便宜を図り、生徒がやりたいことを受け入れる取組が必要なのではないかと思います。

南あわじ市においても、県立高校が1校しかないという状況の中で、県立高校の存続であったり魅力化であったりということが非常に大きな課題になっております。県にはこの状況をしっかりと受け止めていただいて、県と市がしっかりと連携を図りながら、県立高校の存続、魅力化に繋がるような、取組を進めていきたいと考えております。

少し話は変わりますが、先日、県・市町懇話会に出席し、知事等と協議してまいりました。私の方からは、小中学生が激減する中、25人学級の実現への検討、高校が独自性を強化できるような政策の検討、アフタースクール事業に対する支援ということ要望してまいりましたのでご紹介させていただきます。

(3) 中学校部活動地域連携・移行について

【守本市長】 続きまして、協議事項3「中学校部活動地域連携・移行について」、事務局より説明をお願いします。

【柏木スポーツ青少年課長】 資料をご覧ください。まず、これまでの経緯につきましては、少子化に伴い、中学校部活動の維持が困難となってきたことから、令和4年12月に、国はガイドラインを策定し、学校と地域の連携により新たな地域クラブ活動を整備するため、土日に加え、可能な限り平日も視野に入れることとなりました。

そこで、市がめざす方向性として、子どもたちを中心に考え、子どもたちのやりたいことができるような環境を整備構築し、選択の幅を広げられるよう、知恵を出し合って、できることから取り組むこととし、「できるところからできる範囲で」を合言葉に地域連携・移行を進めて現在2年目を迎えています。現在、地域のスポーツ・文化芸術団体に所属する生徒は全体の約2割程度おり、生徒自らが地域に活動を求めるという仕組みができ上がってきています。

これまでに、教職員、児童、保護者、地域クラブに向けて、アンケート調査を実施したり、受入団体説明会の開催、地域の各種団体へ中学生の受入協力を依頼、中学生受入団体に対する活動場所の施設使用料の減免、文化・スポーツ担い手強化応援補助金による支援、指導者向け研修会の実施、中学校部活動顧問と地域団体・教育委員会との意見交換会などに取り組んでまいりました。

課題としましては、中学生の発達段階に応じた受け皿の整備や指導者の確保、地域団体内でトラブルがあった場合の対応、送迎について、場所の確保についてなどが挙げられます。

今後の取組としましては、学校部活動や地域クラブ活動の在り方や運営方法などについて国の動向や他市との連絡調整を図り、段階を踏み、地域や学校、関係団体と連携しながら、子どもたちのみならず、地域の誰もがスポーツや文化芸術活動に親しむことのできる環境づくりを推進してまいります。

また、令和10年度の完全移行に向けて、小中校長会や市部活動地域連携・移行協議会と協議し、多角的な意見を取り入れながら進めてまいります。

今後の検討事項につきましては、部活動の完全地域移行によって部活動がなくなり、子どもたちのやりたいことができなくなるという情報発信とならないよう、やりたいことを選択肢の幅が広がり、地域も活性化していけるよう保護者や小中学生、地域に向けて、南あわじ市の持続可能な地域移行のかたちを示していくことが必要です。そのため、児童生徒へのアンケート調査により子どもたちのニーズを把握するとともに、教員へのアンケート調査では、地域指導者として携わる意向があるかの確認により、指導者の確保や地域団体の充実を図ります。また、スポーツや文化の各種類の活動拠

点を整理するとともに、活動場所の整理も行っていきます。そして、地域指導者への支援、保護者の負担件減等についても、今後検討してまいります。

以上でご説明とさせていただきます。

【守本市長】 この件について、市として重要に考えているのは移動手段の確保についてです。

あまり時間がありませんが、この件に関して、委員の皆様から一言ずついただきたいと思います。

【清水委員】 ひとつ提案ですが、市内にはデイサービスの送迎車がたくさん走っていると思います。ちょうど、デイサービスを利用して自宅へ送って行ったあとの車を、中学生の活動の送迎として利用できないかな、ということを検討していただきたいと思います。

【青木委員】 特に、へき地の学校についてですが、らん・らんバスが学校まで来てくれたらいいのというような意見もあります。何かの形で学校と連携していただければと思いました。

【狩野委員】 中学校の部活動が担ってきた体力づくり、こころづくりを、地域へ移行した後、地域社会ばかりに求めるのはいかなものかと思います。引き続き、学校や家庭でのフォローが必要だと思います。

【橋本委員】 そもそも現在の部活動は、仕事なのか、ボランティアなのかといったところを明確にする必要があると思います。地域移行への取組を、先生が楽をするための取組だと思っている方もいらっしゃると思いますので、最初の導入部分での持って行き方が非常に大事だと思います。

【近藤委員】 欧米では何十年も前から、地域での活動が行われています。日本もここに来て欧米に追いついてきたのかなと感じています。

【山本委員】 クラブチームに入ると、トラブル対応や送迎や経費など保護者の負担が大きくなります。遠征などに参加できない子が出てこないような体制が必要となってきます。やりたいことができる環境を作り、何らかの形で活動できる場が必要になってくると思います。

【新宅教育長】 第一に、子どもたちの意見を取り入れて進めていきます。子どもたち

のニーズがどこにあるのかを把握し、行政としてどんな支援ができるのか、また、送迎の手段も含め、部活動の地域移行を地域コミュニティの活性化へと繋げていきたいと考えています。

【守本市長】 地域の連携と移行にはまだいくつかの段階があると思いますが、今後も調整しながら進めていっていただきたいと思います。

4 閉 会

本日は、たくさんのご意見をいただきありがとうございました。いただいたご意見を取組に反映させながら、南あわじ市の教育を今後も進めてまいりたいと思います。
これをもちまして、令和6年度第2回総合教育会議を閉会いたします。

午後0時10分